泌尿器科紀要

第5巻 第8号

昭和34年8月

随想

甲府湯村にての偶感

東京医科大学教授 田林綱太

世に"浅学菲才"と云う言葉がある．自分も永く使つたが，先輩並に世間に対する巧怜辞飾位に考えていた．所が今日自分の浅学菲才を身に浸みて感じさせられた．その真相はこうである

実は昨年尿道狭窄の研究を行つた．それは永年自分が手にかけた尿道に起る変化であり，また淋疾後に起るのが多いので，優に指導し得ると思つて，教室の緑川に担当せしめた．その時の症例は確か41例である．その検鏡の際，現在迄気附かなかつた事だが，末梢動脈性小血管に種々の変化が起つている．それが淋疾性，外傷性，結核性，原因不明の狭窄にも惹起しているので，これは原因の病気に関連して生じたものではなく，狭窄に依つて起つたものであろうと考えた迄はよかつたが，浅学の悲しさとはこの事だつたが，その取捨に当つて成可く明瞭なものや肥厚状（内膜，中膜，弾力繊維も）のものを記載する様指嗾した．また血管の問題は取扱つた事がないから，詳細は後日に譲る事にする様附言した．此時自分の脳裡をかすめたのは血管炎，Ruiter, Klnige, Klemperer, 馬杉教授の業跡の事等で，本年皮膚科学会でも膠原病の問題を取上げた様だ．少し勉強すれば解ると簡単，単純の考えであつた．時は過ぎた．新学期とともに新たに脈管変性の標本を再検した．小さい末梢血管ではあるが，その変化は色々の種類があり，どれから，どう変つて行くのかさつぱり判らない．それではと文献を探し出した．先学の諸説，読んでいる中は条理解つた様な気がするが，他の人の本を読むと，何か喰違う様な所があり，それが帰納して自分の標本に帰ると，そのどれに当篏るものか，さつぱり判らない．自分が浅学菲才の標本の様だとつくづく自省した．そこで病理の大高祐一教授に教を乞う事にした．標本を抱えて20回も通つたろうか．その恰好は"笑止"であろうが，菲才者は真剣である．大高教授に指摘された文献と標本を持つて今甲府盆地湯村の某所で微風もない炎熱の中に難解な血管炎と悪戦苦闘している．時に朝食の膳に稲田教授からの葉書が乗つている．それは既に先般御委嘱のあつたものを，上記の有様で書けなかつたのである．"ままよ"こうした悩みの真相を卒直にかき我等のひとこま（真相文よりも学問的ミサラブル）を記して稲田教授の好意に答える事にした．

臨床医家は忙がしい．しかし学問には事に真摯である可きであつた．一昨年血管の変性所見に気付いた時，直ちに文献を渉猟し，また大高教授の門下に参じれば，こうした熱苦の苦しみもなく，また門下にも迷惑をかけずに済んだ筈である．各種の雑誌に膠原病，血管炎の記載が載つていたのを見たが，表題だけで他山の石，自分の標本には関係ないもの

として今日迄傍観的態度をとつた事が"浅学菲才"の罪である．指導者としての資格が欠けている．自分自らが負わねばならぬ罪である．茲に卒直に記して臨床医家の多忙に事寄せて後日に譲つて遂に没却する事のない様に，また広く見聞した事は我物になつている様に，今更乍ら痛感した．

◇

京都は日本の古代文化の粋を一堂に聚めている．東京人からは実に羨望の的である事は云う迄もない．私は団欒生活を避けて孤独の座にいる事が多い．相対するものは仏像，古画である．今携え来たるは2尺余の所謂推古仏，何等の装飾もない一木彫の9等身，真黒である．恐らく観世音菩薩と見られる．長面，内思の相貌，菲衣にして肉身ならず，左手僅かに前，右手肘で直角に前に曲げている．持物は既にない．面相にも，衣帯にも微動もない．あるは内寂と真如の相貌姿容のみである．恐らく1,300年前の作であろう．今日は原子時代，人の思想も生活感情も，装飾も，政治も隔絶している．その今時，斯様な一彫刻に何故に我心牽かれ，思いを千歳の昔に馳せるのであろうか，飽かず眼幅を肥している．必死の精塊を尽した，修練の技は，時代も国境も一切を超越して永遠の光りと，美と，信実は幾千歳を経ても変るものが無いらしい．我等の学もその如く，爾後の進化進展は，何れもその基礎の上に樹つ可き精華である．我等遅拙であうとも，唯真信である事を期するのみ．